

東京大学 科学プレゼンテーション・ライティング演習課題

かがくのすがた

2019年～2023年

選抜作品

2019 年度



地球惑星科学専攻修士二年

石川 弘樹

科学とは、直接知覚できない“真実”なるものを、証拠と論理に基づいて何とか知ろうとする試み（方法論と結果の解釈の体系）だと思ったので、のぞき窓を開けるようなイメージと、掘り下げるイメージで作りました。窓から見える像は、気泡や窓自体の歪みによってバイアスがかかっており、ニニでいわれる“科学”ではない“かがく”的なものを表現しようと思いました。窓の大きさは限られており、現実的な制約と有限のデータから全体像を推測することしかできないことを比喩的に表現しようと思いました。

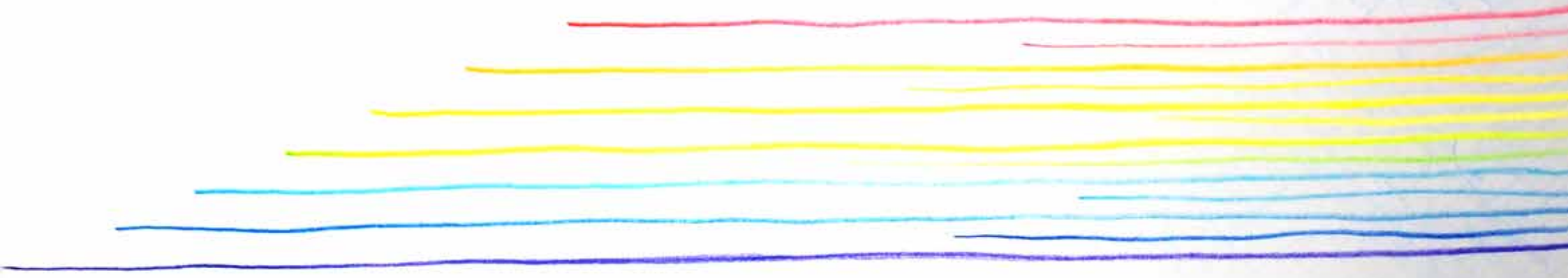


「？」

天文学専攻修士一年

桑田 敦基

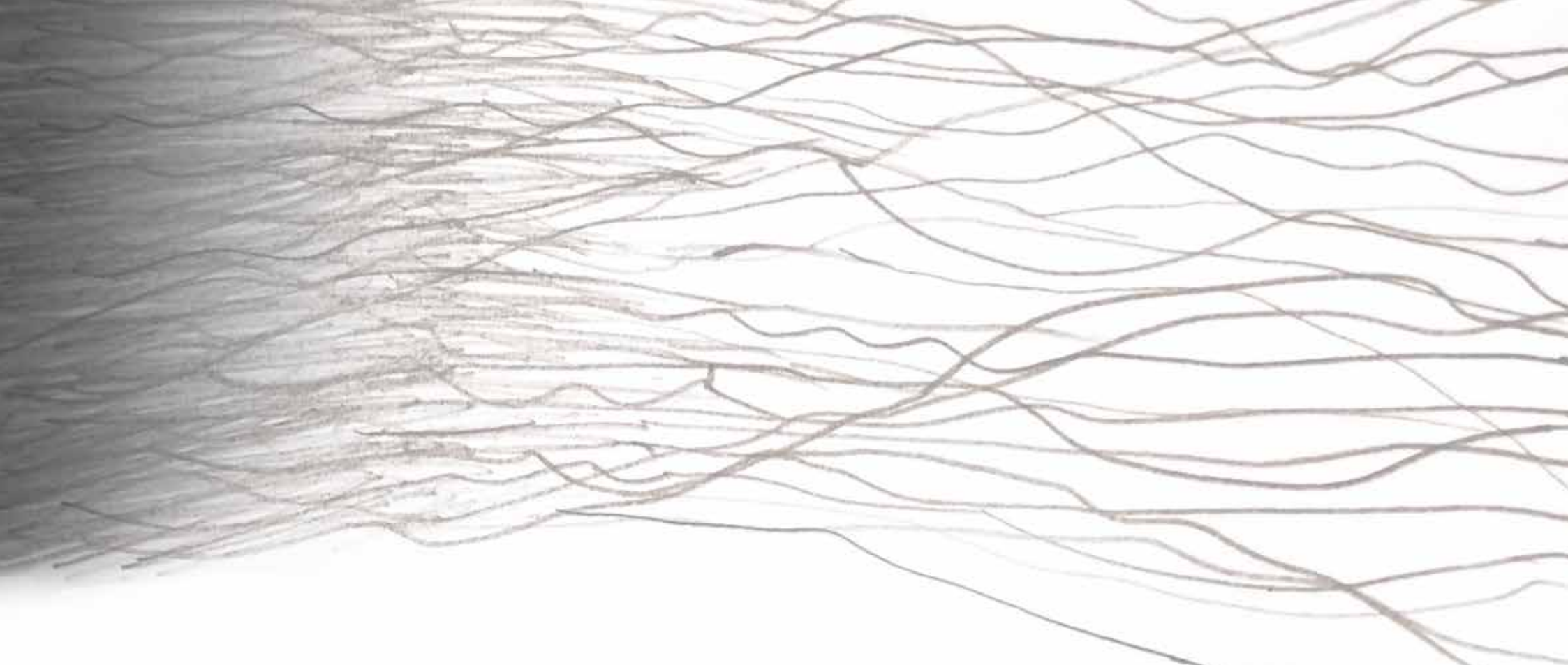




つみかさねると、あらたになるも、かえてくる

天文学専攻修士一年

富永 愛侑



科学とは“視力”が良くなって
見えてきたもの。はじめは何かわからなかった
ものが、だんだん区別されるようになって、
それらは一本ずつの線になって、再びからまり合っ
てもしれない。
科学者は色々な眼鏡を持っている。

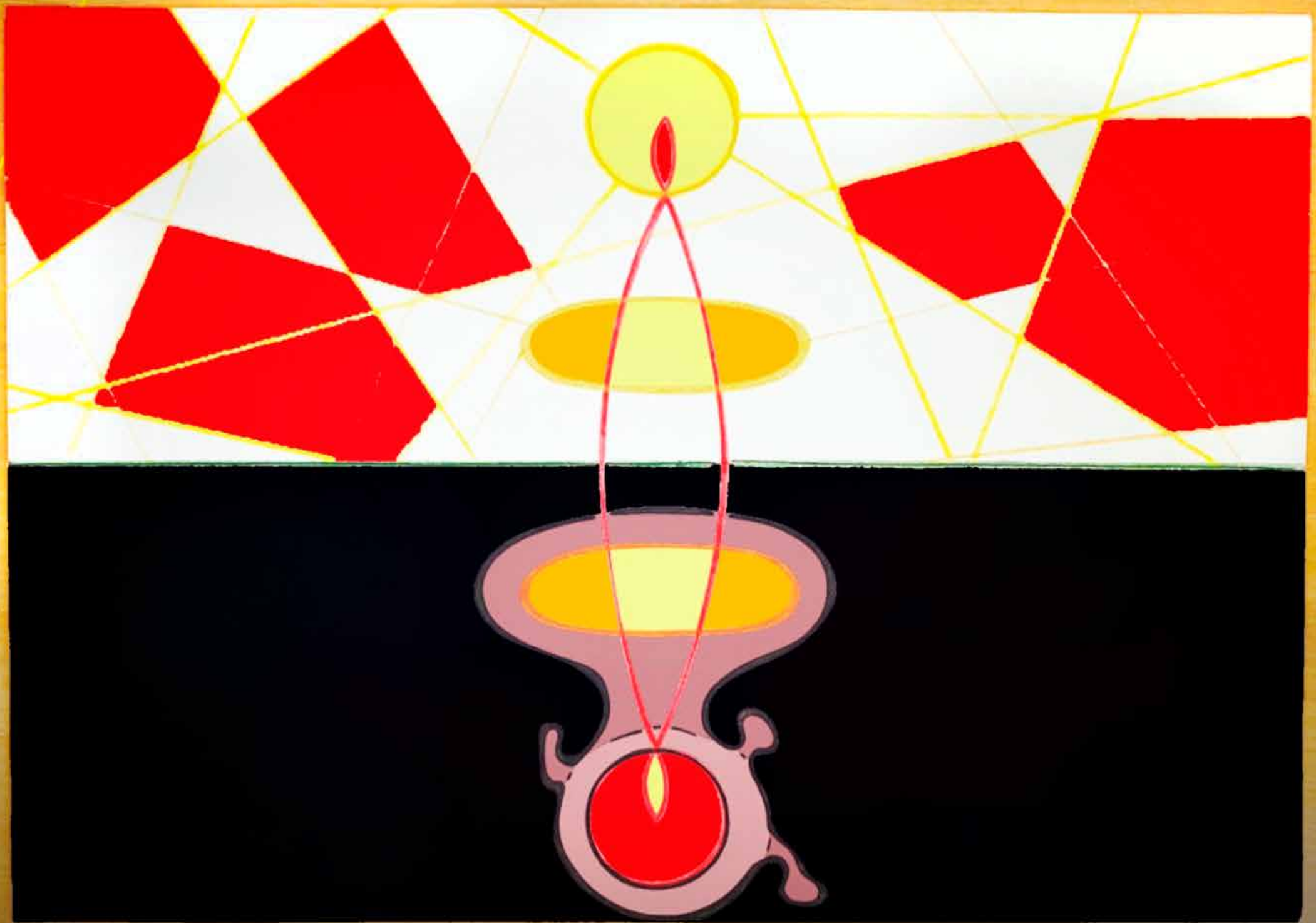
2020 年度

理学系研究科地球惑星科学専攻 修士課程

田中 風羽

| | |
|---|-------------|
| 赤 | 自己 |
| 黒 | 世界 |
| 橙 | モノ, 対象 |
| 黄 | 科学の糸, かがくの網 |

| | |
|------------------|--------|
| かがくの網に照らされた〈せかい〉 | 自己と科学 |
| | モノ, 対象 |
| 見通せない世界 | 自己 |



理学系研究科化学専攻 修士課程

若林 里咲

かがくは永遠に続く人間の営みであり、起点も終点も存在しない無限の営みであることを、メビウスの帯のモチーフで表現してみました。かがくは人間の内で理解され、言葉として紡がれた、外界の解釈の記述であるという意識から、論文をマテリアルとして用いました。言葉を通して、輪の内部（学問としての科学）と外部（身の回りの世界）が触れている部分もポイントです。重なり合った論文は、科学の知の蓄積であり、微かに読めるSynthesisの文字は、人間が科学を技術として発展させてきた側面を象徴しているとも言えるでしょうか。

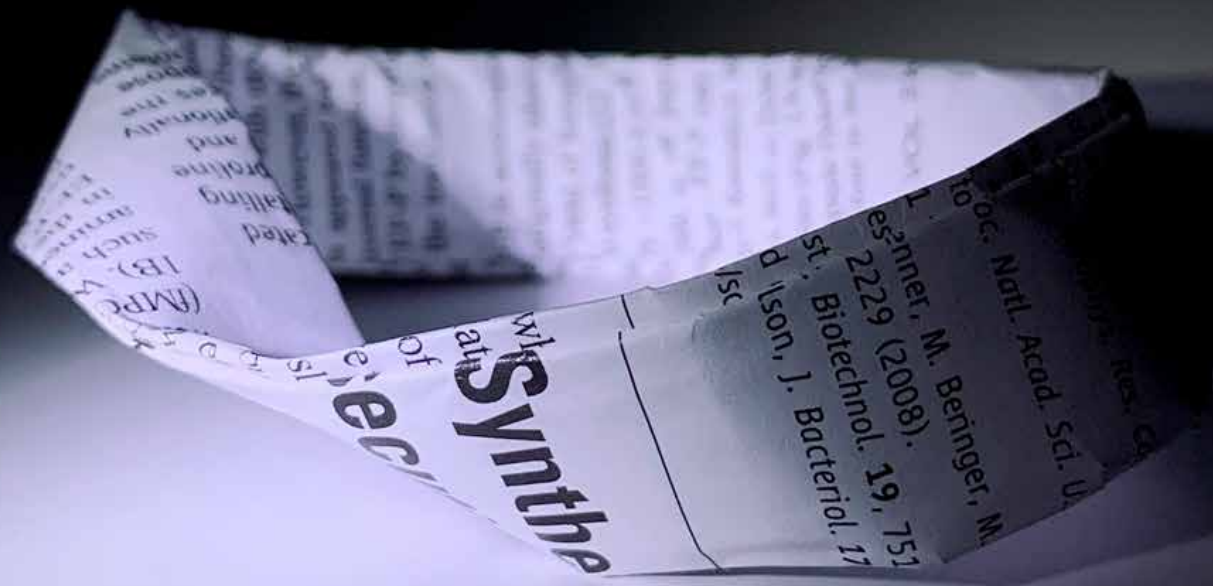
ところで、何が真のかがくなのか？という枠組みを明確にとらえることは難しいと感じます。そもそも、かがくはこの世界の現象を扱い、万人に対して開かれているはずなのに、いつしか「理系」そして「専門」のラベルを貼られ、「芸術」や「宗教」などからは異質の存在として社会から閉ざされた世界となってしまうように感じるのです。特に、基礎研究に携わる身にとっては、外の世界を追究するはずのかがくが、研究室・科学者という狭いコミュニティでのみ発展し、社会との接点を多くは持たないことにどこか大きな矛盾を感じざるを得ません。

そしてかがくには、光が当たれば影もできます。しかも、その光は強ければ強いほど、影も濃くなっていく…。かがくは人の好奇心を満たすだけでなく、今や世の中を大変便利にしていますが、その同じかがくは時に世界を破壊しうるのです。

そんな想いを、輪の内外が隔たれているようでつながりあい、途切れることなく永遠に続くねじれたメビウスの帯のモチーフに、「かがくのかたち」として込めてみました。

かがくのかたち

かがくは、人間による永遠の営み。



そんなかがくの世界は、開いているようで閉じていて、
閉じているようで開いている。

理学系研究科化学専攻 修士課程

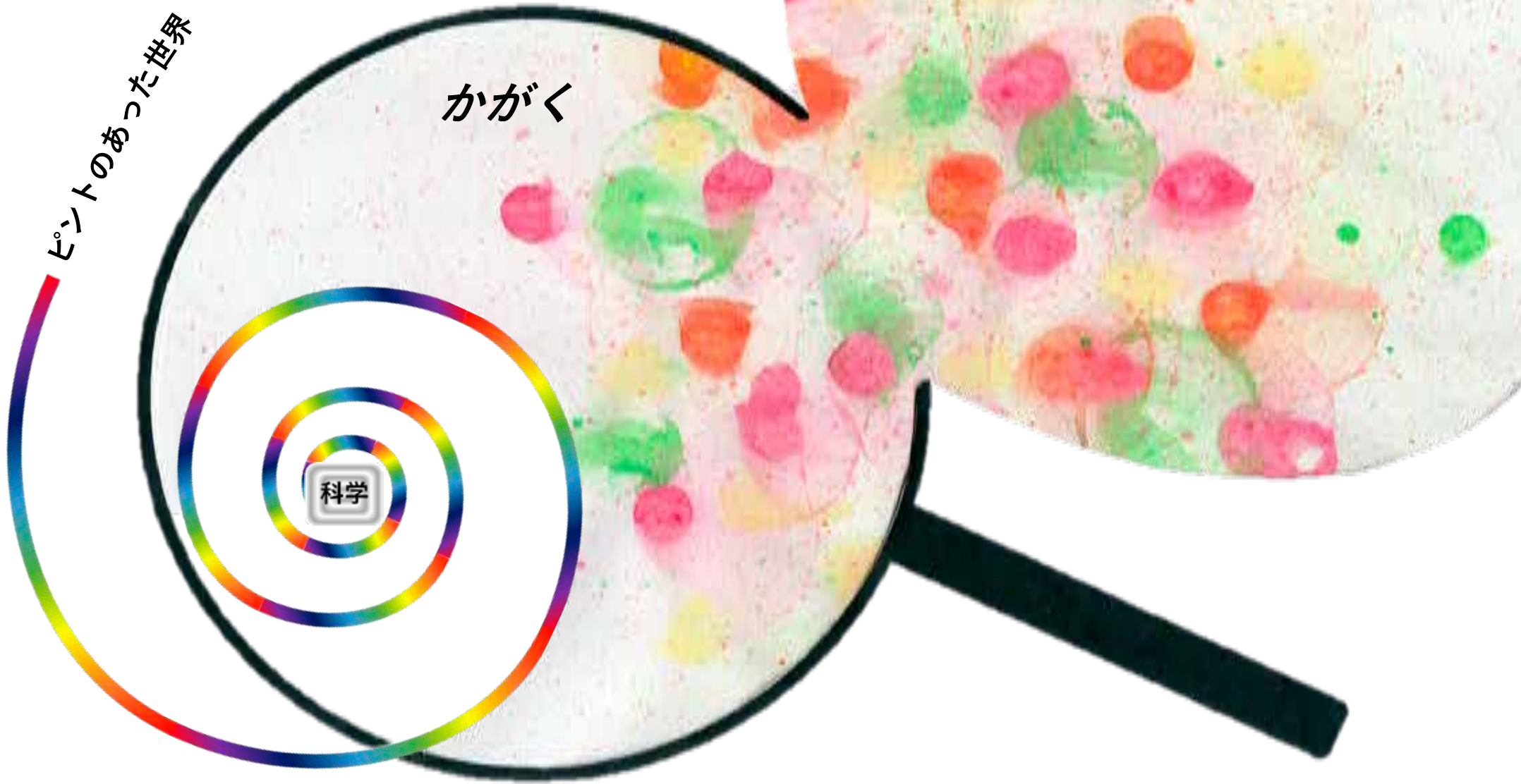
妹尾 史織

「かがく」とは、もやもやした広い世界

かがく

ピントのあった世界

科学



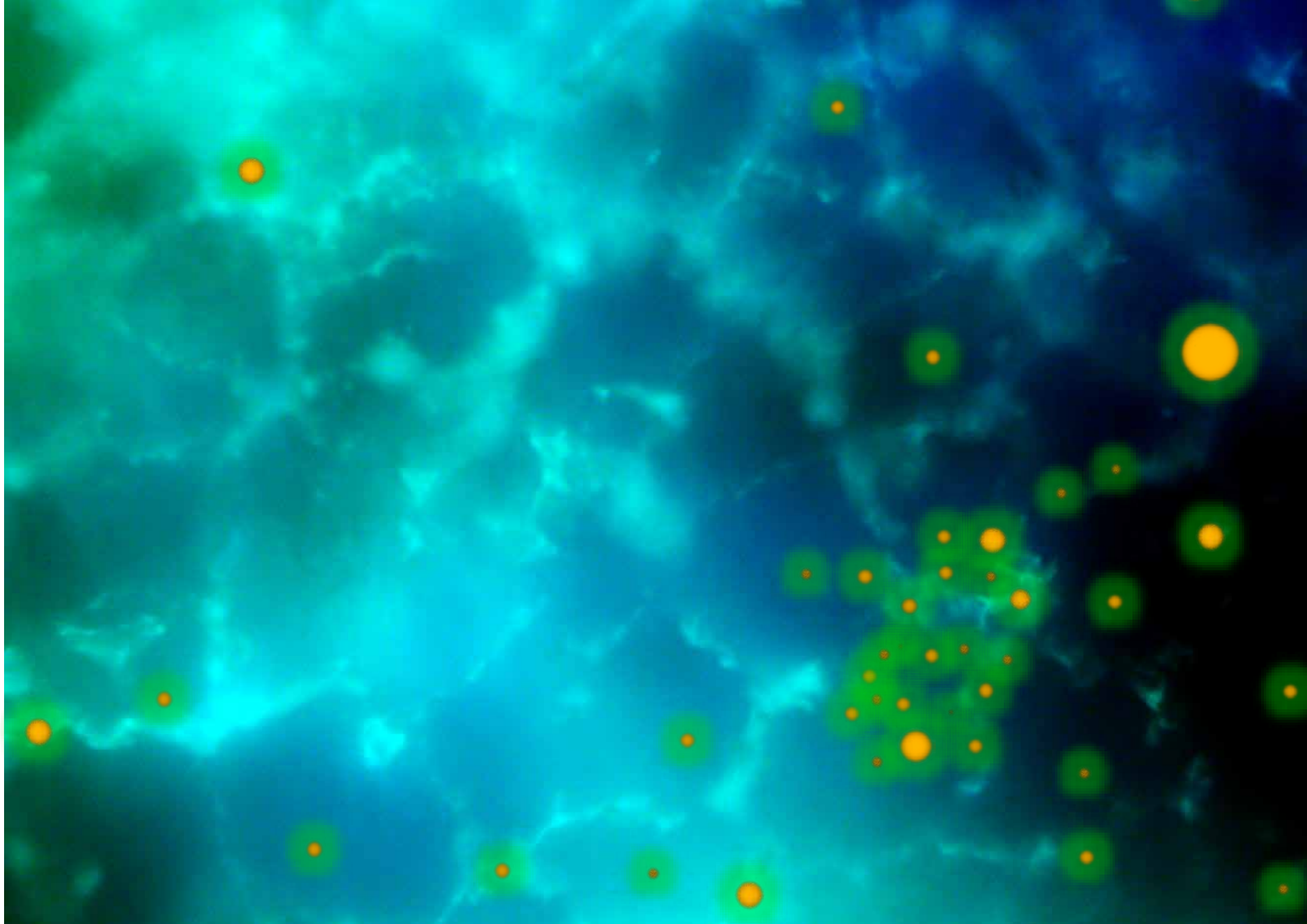
2021 年度

「むら・分散・面白い」

吉村 太郎

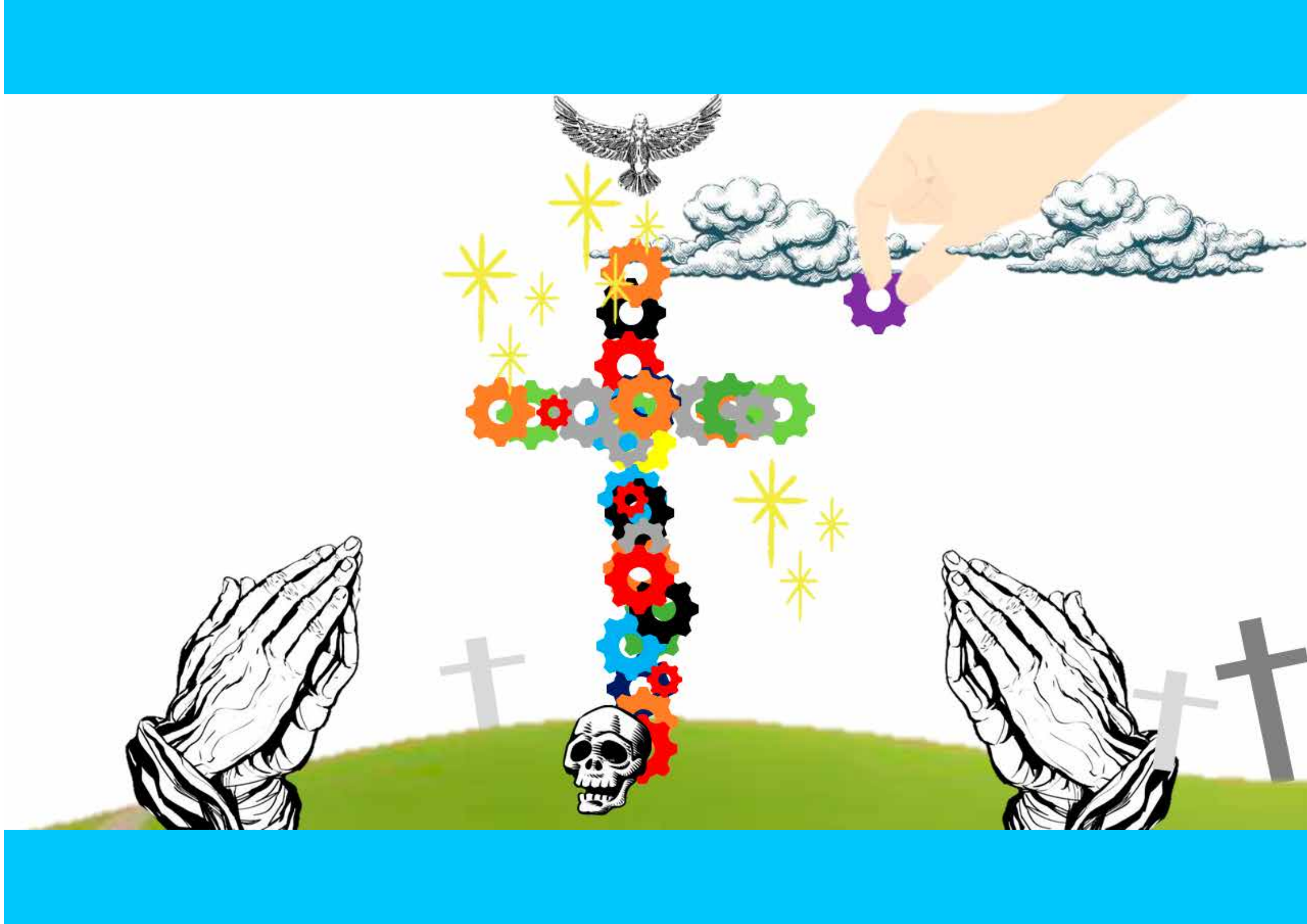
東京大学総合研究博物館
大学院理学系研究科 地球惑星科学専攻

科学の「むら」、自分の「分散」、専門的なことの「面白さ」をあらわしています。
常に変化しつづけ、多様な価値観を包摂した科学の全体像は
完全に焦点をあわせて捉えることができません。
わたしから見た科学も同じです。
そんなマニアックな世界を面白いとおもいあえる文化。



2022 年度

匿名



匿名



2023 年度

仏師は幸せか？

理学系研究科生物科学専攻

中村友香

私にとってのかがくとは、「石の中の仏像」です。どんなに謎な事象でも、その中にはたった一つの答えがあるという前提の元の考えです。研究者は真実を掘り起こす仏師にたとえています。答えはたった一つであることから、アプローチを間違えれば答えには辿り着かないことや、真実に辿り着くピースを永遠に失うことも起こり得ます。また、たどり着いた答えが奇怪であることや、答えが人の手によって捻じ曲げられることもあるでしょう。それでも、科学者は答えを知ろうとし、苦しみます。これが、奥の仏像と人々の状態です。手前にいるのは、科学的な探究をライフワークとはしない人々です。科学者はハードワークかつ不安定な職業ですが、この人たちは科学者ではないので人間らしい生き方ができています。科学に興味がない人の方が、科学者よりも幸せに生きている可能性を示しています。素材の選定にあたって、奥の人々（科学者）には「疲れている人」「泣いている人」などのネガティブなシルエットを用い、手前の人々は人間的なつながりが感じられるシルエットを選びました。

（素材元：pixabay・シルエットAC）



身近な自然観察をしていたい

理学系研究科地球惑星科学専攻

山川隆良

科学が求める真理は、とても大きく明るく、意義深くみえるが、科学者が掴んだものは、真理から漏れ出た僅かな光である。それが照らすものは、あらゆる思惑に支配された社会であって、真理とは離れた方向に広がっていく。

足元に咲く花、貨物列車が線路と擦れる音、潮の匂いに惹かれてしまう我々の好奇心だけは、きっと純粋に大きな光を見つめている。



光明

工学系研究科 先端学際工学専攻

網 淳 子

自分にとって「かがく」は世の中を理解するツールのひとつです。

世の中はよくわからないことだらけ。その曖昧模糊とした状態を、光の印象がとても素敵なターナー風に表現するとどのようになるのか試してみたくなり、背景部分を「曖昧模糊とした状態 ターナー風」と指示し、Bing Image Creatorで作成しました。

そこに一筋の光が射すように、「かがく」の視点で世の中の何かが見えることがあります。ただ、それが真理かどうかはわかりません。世の中には多様な視点があるような気がするのです。

